

ビリーと やぶ 破られた やく そく 約束

しんあい 親愛なる ウサギの ビリーへ、
はる だいいつしゅうめ さいしよ ひ 春の 第1週目の 最初の 日に、ぼくの たんじう 生パーティーが あるので ご招待します。
あい 愛を こめて、
ハリネズミの アレックスより

かあ お母さんが この しょうたいじょう よ 招待状を 読んでくれた とき、アレックスは ちようしょく 朝食を 食べていました。

「そういえば、もうすぐ アレックスの たんじう 誕生日だったんだ。楽しみ だなあ！ アレックスは きっと、かっこいい おもちゃを プレゼントに もらうだろうなあ！」

「ビリー。」 お母さんウサギが い 言いました。「もし 行きたいなら、RSVPを しなくちゃ。もう 5日しか ないわよ。」

「R-S・・・何だって？」と ビリー。

「『レponde・シル・ヴ・プレイ (Repondez, s'il vous plait)』という フランス語の略よ、ビリー。『この しょうたいじょう 招待状に 返事を ください』っていう 意味なの。」 お母さんが 説明してくれました。

「ふうん。」 ビリーは ほほえみました。「きよう がっこう 今日 学校で アレックス と 会った 時に 返事するよ。」 お父さんと お母さんに 手を ふると、ビリーは 朝の 陽ざしの中へと 飛び出していきました。

グリーンシャイア・スクールに 行く 道は、早朝の 陽ざしが あ 当たるころは 特に 美しい 所で した。ビリーは 学校へ 行く とちゅうの 道を 楽しむため、朝は できる限り 早く 家を出る ように しているのです。

「ビリー、ビリー！」 ひだり ほう から 興奮した 声が します。アナグマの スモグルでした。

「ねえ、聞いてよ！」と スモグル。

スモグルの まじめそうな 声に、ビリーは わら 笑って 答えました。「どうしたの、スモグル？」

「お父さんが、まつ 松サーフィンのために あたら 新しい フライシュートを か 買ってくれたんだ！」

ビリーは、それなりの おどろきを あらわ 表しながら い 言いました。「ぼくも 乗って いい？」

「もちろんさ。」と、スモグルが き ど 気取って い 言いました。「らいしゅう 木曜日にね！」 アナグマ団地に 向かいながら、かた 肩ごしに スモグルが い のこ 言い残して 行きました。

(アレックスの たんじう 生パーティーの ひ 日だなあ。) ビリーは そう 思いましたが、そのことに ついては 考えないことに しました。「こういった ことは、いつも うまく いくものさ。」と、ビリーは ひと ごと い 独り言を 言いました。

ビリーは 学校に 着くまでの 道、うれしくて ずっと にこにこしていました。その日の 午後、ハリネズミの アレックスと いっしょに お弁当を 食べましたが、スモグルの フライシュートに 乗れることで 頭が いっぱいで、その日の 朝 受け取った アレックスの たん生パーティーへの 招待状のことは、すっかり 忘れていました。

「ビリー。」 アレックスが 心配そうに たずねました。「ぼくの たん生パーティーの 招待状、受け取った？」

「ああ、そうだった。」 ビリーは 自分の 額を たたいて 言いました。「うん、受け取ったよ。返事するの、忘れてた だけなんだ。もちろん 行くよ。」（その前に ちょっと フライシュートを やる 時間くらい、あるさ。）と ビリーは 思いました。

「よかった。」 アレックスは ほっと ため息を つきました。「人が たくさん いると、ぼく、きんちょう しちゃうんだ。自分の たん生パーティーでもね。親友の 君が いてくれるって わかって、うれしいよ。」



数日が あったという間に 過ぎ去り、いよいよ アレックスの たん生パーティーの 日になりました。ビリーは、アレックスの 家に向かう とちゅうの 木かげの 道を 歩いていました。そこへ スモグルが、大きな 音を 立てて 舞い降りて 来ました。「君のお母さんに、アレックスの 家に向かっているって 聞いたから、この辺に いると 思って 来たんだ。」 スモグルは フライシュートに 乗っていました。確かに、すごい 仕掛けの 乗り物です。ビリーは 生まれて このかた、こんなに すごい 装置は 見たことが ありません。「乗れよ。」と スモグルが 言いました。

ビリーは 太陽を 見上げました。まだ 早い 時間です。松サーフィンをする 時間は 十分 あるでしょう。それに、少しくらい おくれたって、アレックスは わかってくれるでしょう。ビリーが どんなに フライシューティングが 好きか、知っているのですから。

ビリーがついにアレックスのたん生パーティーに姿を現したのは、午後のかなりおそい時間でした。事実、来たお客さんはもう帰ってしまったようです。アレックスは、一人でかしの木 オールド・グラングルの根元に座っていました。低い枝々には かざり用の リボンが かかっている、その下にはプレゼントの山がありました。後ろにあるのは、特に大きくてピカピカ光っていました。ビリーはそばまで来ると、思わず「すごい！」と息をのみました。アレックスも、フライシュートをもらっていたのです！ それに、アレックスのはスモグルのよりも、すてきにさえ見えます。

「ぼく、お楽しみを全部のがしちゃったの？」 ビリーは、何もなかったかのようなそぶりで言いました。何とかして、アレックスが彼の新しいフライシュートにの乗ろうとさそってくれないかと願っていたのです。

アレックスは、座ったまま顔をあげました。悲しそうな顔をして、目はなみだぐんでいます。「来てくれるって、言ったじゃないか。」 か細い声で、アレックスが言いました。



「ああ・・・。」 ビリーは言葉に つまりました。急に、自分が とても はずかしくなりました。「スモグルが 来て、断り切れなかったんだ・・・。けど、今 来たよ。まだ そんなに 暗くないから、遊べるよ。」

「いや、いいよ。」 アレックスは きっぱりとした 声で 言いました。「今は、一人で いたいんだ。」

「じゃあ、明日は どう？」と ビリーが たずねました。

でも、アレックスは すでに 家に 向かって 歩き始めています。ビリーの 言ったことが アレックスに 聞こえたか どうかは、わかりません。

その後の 何日間というもの、アレックスは ビリーを さけているように 思えました。昼食の 時間も、ふつう いっしょに 座る テーブルには 来ないし、授業中も、アレックスは 教室の 一番 前の、リーマス先生の 真ん前に 座っています。こんなこと、今まで アレックスは したことが ありません。

ビリーは 悲しく なりました。ビリーが パーティーに 来てくれるのを 当てにしていると アレックスが 言っていたのに、ビリーは 約束を 破って 友達の 気持ちを きずつけてしまったと わかっていました。ビリーは、どうしたら 仲直りできるか わかったらなあ、と 思いました。

★★★

さて、文化祭の 日になりました。生徒達は みんな、アクアデア滝への 遠足のために 募金集めを していました。レモネードを 売ったり、おいしそうな ぐちそうが どころ 並んだ お店で クッキーを 売ったり している 生徒も いました。

アレックスは 「手製の 羽ペン」と 書かれた 看板の お店に 一人で 座っていました。今まで、文化祭では アレックスと ビリーは いつも いっしょに お店を やって いました。けれども アレックスは、ビリーが スモグルの フライシュートのお店で チケットを 売っていたと だれかが 言っているのを 耳に しました。アレックスは ビリーが いなくて さびしく 感じて いましたが、あの たん生パーティーの 時に ビリーが 約束を 守らなかったことで、未だに 気持ちは きずついたままでした。アレックスは ため息を ついて、お店の テーブルの 上に 頭を のせて いました。

「やあ、アレックス。」 ビリーらしい 声が しました。アレックスが 目を 開けてみると、確かに ビリーでした。

「ぼく・・・あのね・・・。」

ビリーは ほおを ^{あか}赤らめながら ^い言いました。

「君の ^{きみ}お店を ^{みせ}手伝っても ^ていいか、
聞きたかったんだ。」 アレックスが ^な何も
^い言わないのを見て、ビリーは ^みきんちょうした
^{おも}面持ちで ^{はな}話し続けました。「それから、ぼく、
この前 ^{まえ}約束を ^{やくそく}守らなかったことを、あやまり
たかったんだ。友達なのに、君の ^{きみ}気持ちを
きずつけちゃって、ごめんね。でも ^きぼく、
君が ^{きみ}いないと ^{ともだち}さびしくて、また ^{ともだち}友達に
なってほしいんだ。」 「わかったよ。」
アレックスは ^いそう ^{ともだち}言って、友達が ^よもどって
来たことを ^きとても ^{よろこ}喜んでくれました。そして、
文化祭の ^{ぶん}後半も ^{さい}ずっと ^{こうはん}一人っきりで
^{すわ}座っていないくていいことで、さらに
^{うれ}うれしく ^{おも}思いました。

^{ふたり}二人は ^{はな}たくさんの ^{はな}羽ペンを
^う売ることが ^{あした}でき、明日は ^{まる}丸1日、
^{いっしょ}いっしょに ^{フライ}フライシュートを
^{する}することにしました。

「絶対に ^{ぜったい}行くからね。」 ビリーは、
そう ^{やくそく}約束しました。ビリーには ^{まな}学ぶのが
つらい ^{きょうくん}教訓でしたが、^{いま}今では、^{やくそく}約束を
^{まも}守ることの ^{たいせつ}大切さが ^{わか}わかって、^{うれ}うれしいと
^{おも}思っています。

お
終わり



文：R.A.ワターソン 絵：松岡陽子 デザイン：ロイ・エバンス

出版：マイ・ワンダー・スタジオ Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル “Billy and Friends: Billy and the Broken Promise”--Japanese
関連の読み物はこちら ⇒ ビリーと仲間たち、子供のための物語、友情、頼りになること